

絵本による福祉的地域振興可能性の検討

佐野 智子¹⁾ ・ 中尾 玲一²⁾ ・ 広瀬 美和¹⁾
尾関 立子¹⁾ ・ 宮澤 純子³⁾ ・ 飯島 亜樹³⁾

1 はじめに

保育所や幼稚園などの保育現場では、日々の保育に絵本は欠かせないものになっている。また、日本の家庭の7割以上で、0～1歳代に絵本の読み聞かせが開始されている（秋田・無藤，1996）。文部科学省の報告書（2004）によれば、半数以上の保護者は子どもの頃に読み聞かせをしてもらった体験はないものの、その子ども世代である児童・生徒たちの約9割が幼児期に読み聞かせをしてもらったと回答している。2001年より0歳児健診で「ブックスタート」も始まり、「親子のふれあい」のきっかけとして絵本の重要性が認められている（横山，2004）。

「ブックスタート」とは、すべての赤ちゃんに絵本を提供し、同時に子どもと共に絵本を楽しむ体験を提供する活動である。1992年にイギリスで“Share books with your baby!”のキャッチフレーズで開始された（NPOブックスタート、「ブックスタートのあゆみ」より）。日本では、2000年の「子どもの読書年」をきっかけにブックスタートが紹介され、世界で2番目に、2001年4月より始められた。2018年11月30日現在、全国で1035市区町村が実施している。本学近隣の東金市、大網白里市、山武市でも実施している。

2000年の「子どもの読書年」を契機に、この他に「絵本ワールド」が開始された。これは絵本の販売とワークショップが行われるイベントで、全国各地で開催されている。「絵本ワールド」は、開催地域の実行委員会（県立図書館・地元読書グループ・ボランティア・地元新聞社など）が中心となって事業を運営する（公益社団法人読書推進運動協議会ホームページより）。したがって、このような絵本に関連するイベントを実施することで、地域の活性化につながると考えられる。例えば、和歌山県有田川町は、絵本を通じて子育てにやさしい街づくり、10年以上前から取り組んでいるが、絵本のイベントを年1回開催している（有田川ライブラリーホームページより）。

本研究では、絵本の配布や読み聞かせ等の読書啓発活動が、東金・山武・大網地域の子ど

¹ 福祉総合学部福祉総合学科

² メディア学部メディア情報学科

³ 看護学部看護学科

もたち（子育て家庭）に対して、地域振興として有効であるかを検討する。本研究は3つの研究からなっている。研究1では、絵本ワールドを実施することにより、その地域振興の可能性を検討する。研究2では、他大学の絵本ワールド実施事例を検討する。研究3では、地域の保育者を対象とし、地域における絵本の福祉的ニーズを調査する。

2 研究1 絵本ワールド実施による地域振興可能性の検討

2-1 目的

絵本イベントである「絵本ワールド」を東金キャンパスの大学施設で開催し、地域振興への有効性を検討することを目的とする。

2-2 方法

2-2-1 準備

① 絵本ワークショップの準備

<学生によるワークショップ準備>

佐野ゼミの学生を中心に、子ども福祉コースの3、4年生でワークショップの準備を行った。夏休みにブレインストーミングで企画案を検討し、①読み聞かせワークショップ、②恐竜パズル、③恐竜クイズ、④恐竜神経衰弱を実施することに決定した。その後、環境構成の準備も含め、それぞれのワークショップの準備を行った。

<協力依頼および広報>

2017年10月18日 メディア学部・中尾と福祉総合学部・佐野が日本児童図書出版協会の総会に出席し、絵本ワールドへの協力を依頼し、承認を得た。その後、東金市、近隣の幼稚園・保育所に絵本ワールドのチラシを配布した。

② 質問紙の作成

絵本および絵本の読み聞かせに対する意識を調査するために、質問紙を作成した。近年、病院内での長期療養中の子どもたちや、障害児施設、養護施設等の子どもたちに対して読書啓発活動などが行われている（たとえば公益財団法人伊藤忠記念財団、「子ども文庫助成事業」より）ことから、病院でのニーズや障害理解に関する質問項目を加えた。基本属性として、年齢、性別、子どもの数、子どもの年齢と性別についても項目を設け、意識調査の項目は30項目であった（資料参照）。

2-2-2 絵本ワールドの開催とアンケート調査

① 絵本ワールドの開催

2017年11月4日～5日の2日間、東金キャンパスたぶテラスにて、絵本ワールドを実施

した。内容は、①読み聞かせワークショップ、②恐竜パズル、③恐竜クイズ、④恐竜神経衰弱、⑤絵本作家によるワークショップ、⑥絵本の展示即売会であった。①～④に関しては子ども福祉コースの学生たちが、⑤と⑥に関してはメディア学部の学生たちが担当した。

② アンケート調査

来場者のうち同意の得られた47人（男性8人、女性38人、不明1人）に予備的調査を実施した。調査用紙は30項目からなり、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法にて回答を求めた。

2-3 結果と考察

① 絵本ワールドの実施

両日ともに乳幼児を連れた来場者は少なかった。学生たちの主催したワークショップのうち恐竜パズル、恐竜クイズ、恐竜神経衰弱に関しては、多くの小学生たちが夢中になって参加していた（図1参照）。しかし、読み聞かせワークショップの参加者は少なく、特に2日目の参加者は極めて少なかった。また、大人が展示即売会の絵本を眺めている姿はあったが、子どもたちが絵本を手にとる姿はほとんど見られなかった。

大学で絵本ワールドを実施することの課題や配慮すべき点が浮き彫りになった。まず、乳幼児を連れた来場者が少なかった点に関しては、広報不足や自治体との協力体制が整っていなかったことが課題と考えられる。チラシの出来上がりが開催直前であり、自治体や近隣保育所・幼稚園等への配布が遅れた。その結果広報が不十分で、絵本ワールド開催に関する周知が徹底されなかった。その他に、各自治体や関係機関との連携が不足していた。例えば、図書館、ブックスタートの関連部署、各教育委員会やテレビ局等と、事前に十分な協力体制を構築しておくことが重要であろう。

また、大学の備品は大人用のサイズであるため、配慮が必要である。絵本展示に用いたテーブルの高さは幼児や小学生には高かった。さらに配置にも課題があった。テーブルの手前は子どもたちにも絵本が見え、手が届く位置であった。しかし、テーブル中央部の絵本は見えにくく、手にとりにくい。しかも、中央部の絵本は背表紙が上を向いている本があったが、子どもの身長では背表紙を見ることができない。子どもたちが展示されていた絵本を手にとらなかった要因は、このような展示上の配慮不足が要因と考えられる（図1参照）。その他に、同じ会場で絵本展示と複数のワークショップが行われていたため、子どもたちがじっくり絵本を読む雰囲気ではなかったとも考えられる。



図1 大学祭での「絵本ワールド」の様子

左上：環境構成を準備する学生たち（大学祭前日）

右上：絵本の展示即売コーナー、テーブル手前は子どもたちの手が届く位置であるが、中央は手が届きにくく、背表紙が上を向いている絵本もあり、どのような絵本が置いてあるのかわかりにくい

左下：恐竜クイズに参加している子どもたち、 右下：恐竜パズルは大人気だった

② アンケート調査

「とてもそう思う」と「ややそう思う」を合計し、全体に占める割合を算出した。ここでは、絵本のイベントに関連する項目だけを記述する。「乳幼児には絵本が必要だ（100%）」、「地域で読み聞かせ活動をしてほしい（80.8%）」、「絵本を紹介するイベントを地域で開催してほしい（84.8%）」、「絵本を販売するイベントを地域で開催してほしい（69.0%）」という結果となった。乳幼児には絵本が必要であり、地域での読み聞かせ活動や絵本の紹介イベントを希望していることが明らかになった。しかし、絵本の販売に関しては、若干値は低く、読み聞かせと絵本の紹介ほどは希望していなかった。来場者に調査を実施したため、絵本に興味や関心のある対象者だったというバイアスはあるものの、絵本、読み聞かせ、絵本の紹介イベントに関するニーズはあると考えられる。

3 研究2 絵本ワールドの事例検討

3-1 目的

「絵本ワールド」を実施している他大学において、聞き取り調査を実施することで、取り組み内容及びその効果、今後の課題等について検討をすることを目的とした。

3-2 方法

鳥取看護大学における「絵本ワールド」に赴き、現地の担当者から聞き取り調査を行った。期間は2017年11月17日～19日、調査者はメディア学部・中尾玲一准教授であった。

3-3 結果

3-3-1 協力体制

鳥取看護大学における絵本ワールドの協力体制は以下の通りであった。

主催：新日本海新聞社

共催：鳥取看護大学・鳥取短期大学、「絵本ワールド in とっとり」実行委員会

協力：鳥取県書店商業組合、日本児童図書出版協会

後援：6自治体（鳥取県、倉吉市、三朝町、湯梨浜町、北栄町、琴浦町）、

6教育委員会、鳥取県図書館協会、鳥取県読書推進運動協議会、

鳥取県子ども家庭育み協会、鳥取県私立幼稚園・認定こども園協会、

鳥取県国公立幼稚園・こども園長会、鳥取県小学校長会、鳥取県PTA協議

会、鳥取県子ども会育成連絡協議会、子どもの読書推進会議、NHK鳥取放

送局、日本海テレビ、BSS山陰放送、TSK山陰中央テレビ、エフエム山陰、

鳥取中央有線放送、日本海ケーブルネットワーク

3-3-2 開催イベント内容

イベント内容は以下の通りであった。2日間で約600名が来場した。

①講演会「くすのきしげのり」「村上慧」（18日）、「平田昌広・平田景」（19日）

②展示「子どもたちの描いた住みたい家」「珍しい絵本」「ミニ図書館」「移動図書館車」など

③ワークショップ「おはなしの部屋」「あそびの部屋」「家をつくってみよう」など

④展示販売「絵本がいっぱい！」

3-3-3 聞き取り調査から明らかになった課題

絵本ワールドを実施するうえでの課題として、運営支援、イベント配置、広報の3点があげられた。各業界団体（児童図書出版界、書店協働組合）から人的支援と県からの資金支援によって運営されたが、各業界団体からの支援はあくまでもサポートであり、主体は

大学であり、講演料は大学の負担であった。

大学で絵本ワールドを行う場合、イベントの配置にも留意すべきである。今回の取材では、展示即売会と講演やワークショップの会場が離れており、簡単には行き来ができない状況であった。

広報に関しては、主催の新日本海新聞社により実施されていたが、新聞での広報が中心で、電波系の告知やネットでの告知については不十分であった。電波系については、後援として複数の放送局が連ねているが、集客の数字からその機能を十分発揮できていないと言わざるを得ない。ネット系は、web については対応していたが、ブログやツイッターについては、人員を充てることができず対応できなかったとのことであった。

3-4 考察

絵本ワールドの開催は、その協力体制の構築ができれば、地域の文化的に振興させる方策としては有効であると考えられる。「絵本ワールド in とっとり」では、多くの自治体、関連する協会、放送局が主催、共催、後援として名を連ね、協力体制があった。しかし、この体制をどのように有機的に連携し、活用していくのが最大の課題である。

本学では、このような協力体制を十分に構築しないまま実施したため、広報や集客に課題があったと考えられる。今後、本学において継続実施する場合、自治体の教育委員会や子育て支援課、保育所・幼稚園・こども園、図書館等と地域ネットワークの構築の上に、広報強化をしていくことで、より多くの集客が得られると考えられる。それが実現できれば、地域振興の起爆剤になる可能性はある。

4 研究3 地域における絵本の福祉的ニーズの調査

4-1 目的

地域の保育者を対象として、絵本の配布や読み聞かせ活動に対する意識を調査し、絵本関連活動への期待度や期待内容を探ることを目的とする。

4-2 方法

対象： 東金市、山武市、大網白里市の公立幼稚園、保育所ならびにこども園に勤務する保育者を対象とした。

調査用紙： 研究1で作成したものを使用した。

手続き： 各自治体の教育委員会や子育て支援課の了解を得て、各施設長あてに依頼状と同意書を送付した。同意の得られた施設に調査用紙と返信用のレターパックを送付した。返信用のレターパックで回答を回収した。301名（男性12名、女性289名）から回答を得た。

実施期間： 2018年2月9日～2月28日

倫理的配慮： 回答はすべて任意の意思によるものとし、本学倫理委員会の承認（申請番号：21X1700601C、2018年2月9日承認）を得て実施した。

4-3 結果と考察

「とてもそう思う」と「ややそう思う」を合わせ「そう思う」、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」を「そう思わない」とし、度数とパーセンテージを算出した（図2参照）。「そう思う」の割合が最も高かった項目は、「乳幼児には絵本が必要だ（99.7%）」で、研究1の結果と同様、乳幼児には絵本は欠かせないものとしてみなされていた。その他に、「ことばの育ちに役立つ絵本は必要だ（83.7%）」、「触覚をつかうなど、障がいをもつ子が楽しめる絵本が必要だ（81.7%）」、「自然環境の理解を促す絵本は必要だ（78.9%）」、「障がいの理解に絵本は役立つ（64.8%）」、「社会のルールを理解を促す絵本は必要だ（62.1%）」などの割合が高かった。対象が保育者だったため、保育者としての視点が反映されていたようだ。絵本は楽しむものであるが、同時に、子どもたちがことばや自然環境、社会のルールを理解するために役立つと認識されていた。

誰が読み聞かせをすべきかに関しては、「乳幼児には保護者が読み聞かせをするべきだ（75.7%）」、「家庭で読み聞かせをすることは難しい（9.6%）」、「乳幼児には専門家が読み聞かせをするべきだ（5.4%）」と、乳幼児には保護者が読み聞かせをすべきで、それは難しいことではないと考えられていた。

絵本に関連したサービスの希望については、「自治体による絵本に関するサービスに満足している（32.1%）」、「絵本に関する公的なサービスの情報は十分である（22.6%）」と自治体による絵本に関する情報提供やサービスにはあまり満足していないことが明らかになった。また、「病院等の待合室に絵本があると過ごしやすい」にそう思うという回答の割合が87.9%と高く、保育の現場や図書館だけでなく、多様な場で絵本のニーズがあることが示唆された。「図書館で読み聞かせ活動をしてほしい（64.5%）」、「絵本を紹介するイベントを地域で開催してほしい（60.1%）」、「地域で読み聞かせ活動をしてほしい（60.1%）」、「地域で子育て家庭に絵本の配布をしてほしい（57.8%）」と地域における絵本の配布や読み聞かせ活動に関しての要望が6割前後あることが明らかになった。

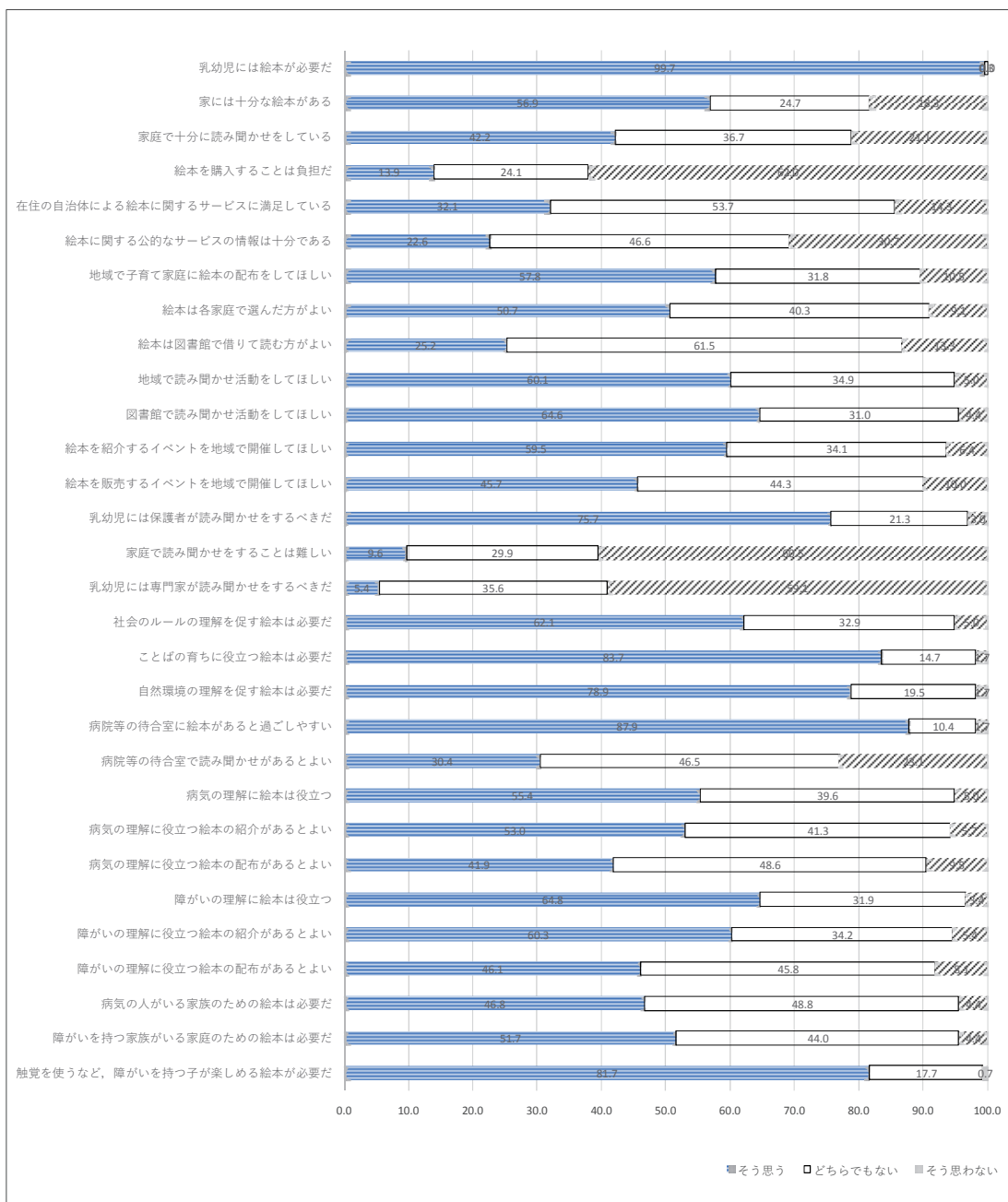


図2 アンケート調査結果

以上の結果から、絵本は乳幼児期に不可欠のものであり、絵本の読み聞かせや絵本を紹介するイベントに関しても要望が高いことが確認された。しかし、単発のイベントを希望しているというよりも、「病院等の待合室に絵本があると過ごしやすい（87.9%）」や「図書館で読み聞かせ活動をしてほしい（64.5%）」の回答から、子育て中の親が日常的に利用できる絵本、場や機会を望んでいると考えられる。

5 総合考察

5-1 絵本による地域振興の可能性と限界

研究1と研究3の結果から、地域の保護者も保育者も同様に、絵本が乳幼児期に不可欠と捉えており、絵本に関する情報、絵本の読み聞かせや紹介イベントなどへの期待を有していることが確認された。したがって、地域振興の可能性はあると考えられる。しかし、保護者や保育者は単発のイベントではなく、日常的なサービスを希望していることが示唆された。絵本ワールドのイベントによる地域振興の可能性はあるものの、それはきっかけに過ぎない。保護者や保育者が子どもたちと毎日絵本に触れられるような環境整備が必要である。

ここで絵本による地域振興に成功している有田川町の取り組みについて、有田川ライブラリーのホームページを参考に述べる。有田川町では絵本イベント「絵本マルシェ」を年1回開催しているが、図書館設備が非常に整っており、読み聞かせやおはなし会、原画展などを恒常的に実施している。有田川町には、4つの図書館があり、それぞれが異なる機能をもつ。本のあるカフェ「ALEC」は、カフェのある図書館で、イベントスペースの貸し出しや研修室も備えており、地域交流センターとしての機能を有する。ちいさな駅美術館「Ponte del sogno」は、駅に併設されたスペースで、2000冊の絵本の蔵書があるほか、絵本の原画展やおはなし会等のイベントも実施している。「金屋図書館」は児童書専門の図書館であるが、ここでもおはなし会やワークショップなどのイベントを実施しており、乳児から児童までが楽しめる。「しみず図書館」は自然豊かな環境にある中学校の図書館である。児童書から一般書までを備えている。2014年3月には「有田川町こころとまちを育む読書条例」が制定され、本格的に読書活動を推進している。

有田川町の絵本による地域振興が成功した理由は、自治体を中心となり、常に絵本がある環境を整備し、その活動を推進していることにある。本研究のアンケート調査からも、保護者や保育者たちは、このような日常的に絵本に触れる機会を求めている。山武市には、「さんぶの森図書館」、「松尾図書館」、「成東図書館」があり、いずれの図書館も、絵本や児童書を楽しむスペースが整えられている。それぞれの図書館で、わらべうたの会、おはなし会、絵本を楽しむ会を毎週または月1回実施している。そして図書館専用のホームページがあり、それらの情報を掲載している（山武市図書館ホームページより）。したがって、山武市には有田川町のような環境が整っていると考えられる。一方、東金市や大網白里市では、ここまでの環境は整っていない。

研究2において、自治体や各業界団体との有機的な協力体制の構築や広報の方法について検討すべきであることが明らかになった。また、本学で「絵本ワールド」を実施する場合、自治体の教育委員会や子育て支援課、保育所・幼稚園・こども園、図書館等と地域ネットワークを構築することの重要性を指摘した。地域ネットワークを構築する際、本学近隣の3つの自治体で絵本への取り組みの異なるなか、どのように体制づくりをしていくのが課題となるだろう。

5-2 今後の展望

最後に、絵本や図書活動の普及について、本学がどのように地域に貢献できるかについて、今後の展望を述べる。本学は環境・人材ともに多くのリソースを有する。8学部10学科を有し、さまざまな領域の専門家と、キャンパス内には図書館等の施設と豊かな自然環境がある。これらの人的・物的・知的リソースを活用することで、絵本による地域振興を加速させられるだろう。そのために必要なことは、以下の3点である。①各学部で教育の中に絵本を導入すること、②大学で実施する地域貢献活動の中に絵本を用いること、③地域と絵本活動の連携をとること。

第1の教育の中に、絵本を導入するというのは、子どもに関わる職業を目指す学科の学生たちは、絵本を熟知する必要があるからである。特に福祉総合学科、看護学科、メディア情報学科では必要性が高いと考えられる。福祉総合学科の子ども福祉コースでは、保育の専門職を養成している。したがって、学生たちは多数の絵本に精通していなければならない。また、高齢者と絵本を読みあうことにより、双方に効果が得られると考えられるため(村中, 2002)、介護福祉コースの学生にも絵本を学んでほしい。看護学科では、小児医療におけるプレパレーションに遊びや絵本、紙芝居などが用いられており、日本の文化や環境に適応した小児医療における遊びのスペシャリストの養成が望まれている(田中ら, 2007)。したがって、看護学科でも学生たちは絵本や紙芝居などを知る必要がある。メディア情報学科でも、メディアとしての絵本は研究対象になりうる。その他、異文化理解に関しても、絵本は役立つ教材になりうる。学生たちが多様な絵本を学ぶために、絵本の蔵書を増やすことも必要である。

第2に、大学で実施する地域貢献活動に絵本を用いることをあげた。子ども福祉コースでは、2016年度より子育て支援活動を行っている(2018年度より「親子ふれあい(子育て支援)ルーム くじらキッズ」に名称変更)。これは地域の3歳未満の子とその保護者を対象に、親子が楽しめる場を提供するものである。活動3年目にしてキャンセル待ちが出るほど、地域に定着しつつある。会場に絵本を準備して、親子が絵本を楽しめるようにしたり、絵本を読み、それに合わせて体を動かしたりと、活動の中に絵本を組み込んできた。このような活動をさらに推進していくことが肝要である。

研究3で「触覚をつかうなど、障がいをもつ子が楽しめる絵本が必要だ(81.7%)」、「障がいの理解に絵本は役立つ(64.8%)」という回答があったが、福祉関連絵本(佐野ら, 2018)の情報などを地域に発信していくことも有効であろう。大学内に、親子が布絵本や点字絵本を楽しめるスペースを作ったり、福祉関連絵本の展示会を開催したりしていくことも一案であろう。絵本を読めるスペースでは、福祉関連絵本に限らず、多様な絵本を準備しておき、地域の人々に開放できるとよいだろう。具体的な方法については今後の検討課題である。

2018年度看護学科では「パパママクラス」を開催した。このパパママクラスには乳児をもつ父母が子どもとともに参加し、男女の思考の違いによるイライラの原因やその対処法について学んだ。このような地域の保護者を対象とした活動にも、何らかの形で絵本を導入する

ことも可能だろう。

また、人材を活かし、サイエンス教育に絵本を用いることも可能である。地域の幼児や低学年の児童に向けたサイエンス・ワークショップを開催し、そこに絵本を導入する。蒲郡市の海科学館では、低年齢層の子どもたちにワークショップを行う際に、絵本を導入することで興味や意欲をもたせ、学びの深化を可能にした（川上ら，2013）。こういった活動を大学のキャンパスや、次に述べるように地域の科学館等で実施することで、絵本を用いた教育活動を展開できる。地域貢献活動への絵本の活用は他にも考えられるだろう。

第3に地域連携をあげた。先に述べたサイエンス・ワークショップを東金こども科学館や成東・東金食虫植物群落などで実施することは、科学教育に役立つ。各自治体の図書館、子育て支援課、教育委員会、保育所、幼稚園、こども園等と連携して、日常的な絵本活動を実施していく。例えば、山武市のように図書館環境が整っている自治体に対しては、「おはなしのへや」や「ほんのいえ」等のおはなし会を実施する場所で、本学学生たちが読み聞かせ会やおはなし会を開催させていただきながら、連携を強めていくことや、保育所や児童館等で大学生がワークショップを行うといったことが考えられる。こういった活動は保育者を目指す学生たちにとっては、実践的な学びの場になり、地域にも貢献するであろう。

読み聞かせ会やおはなし会は、日本の絵本だけに限らない。国際大学の強みを活かし、海外の絵本を学生が紹介することも可能である。多様な国々の絵本を紹介するだけでなく、日本の絵本を別の言語に翻訳し、紹介することも本学のリソースを使えば可能である。

研究3のアンケート調査において、「病院等の待合室に絵本があると過ごしやすい(87.9%)」という回答が多かったが、病院や郵便局等の地域の親子が立ち寄りそうな場所すべてに、どのようにしたら絵本を配置できるかを検討することも今後の検討課題である。

課題はあるが、それらを克服しながら、大学と地域で連携しつつ、絵本を用いた活動を継続していきたい。絵本関連活動を通して、将来的には地域が、子育てしやすい町、教育水準の高い町、多様な文化を享受できる町として発展していくことを願う。

謝 辞

調査にご協力くださったすべての方々に心より感謝申し上げます。

本研究は2017年度学長所管研究奨励金を受けて実施した。本稿は2018年5月25日に実施された学長所管研究奨励金研究報告会にて発表した内容に加筆・修正を加えたものである。

【参考文献】

- 秋田喜代美・無藤隆（1996）幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討，
教育心理学研究，44(1)，109-120.
- 有田川ライブラリー「ニュース・イベント情報」
(<http://www.town.aridagawa.lg.jp/aridagawalibrary/news-event>，2018年5月17日アクセス可能)
- 川上昭吾・長沼健・廣濱紀子ら（2013）科学館における地域連携活動の展開—科学絵本の読み聞かせと
体験活動を結ぶ新しいスタイルのワークショップの実践—，愛知教育大学教育創造開発機構紀要，
vol.3，131-137.
- 公益社団法人読書推進運動協議会ホームページ「絵本ワールド」
(<http://www.dokusyo.or.jp/suishin/ehonworld.htm>，2018年2月1日アクセス可能)
- 公益財団法人伊藤忠記念財団 「子ども文庫助成事業（事業概要）」
(<http://www.itc-zaidan.or.jp/support.html>，2017年5月17日アクセス可能).
- 文部科学省（2004）平成16年度文部科学省委託事業 図書館の情報拠点化に関する調査研究 親と
子の読書活動等に関する調査，日本経済研究所.
- 村中李衣（2002）『お年寄りと絵本を読み合う』 ぶどう社.
- NPO ブックスタート 「ブックスタートのあゆみ」
(<http://www.bookstart.or.jp/about/ayumi.html>，2018年5月10日アクセス可能)
- 山武市立図書館ホームページ 「児童サービス」
(https://lib.city.sammu.lg.jp/riyo_kids.html，2019年1月11日アクセス可能)
- 佐野智子，広瀬美和，所 貞之，尾関立子，大内善広，トゥンマン武井典子（2018）福祉関連絵本デー
データベース化の試み，城西国際大学紀要，26(3)，103-118.
- 田中恭子，南風原明子，今紀子ら（2007）小児の療養環境における遊び・プレパレーション・その専門
家の導入についての検討 小児保健研究，66(1)，61-67.
- 横山真貴子（2004）幼児期における家庭での読み聞かせ，発達，99，27-30.

No.	質問項目	とてもそう思う	ややそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	全くそう思わない
6	絵本に関する公的なサービスの情報は十分である	5	4	3	2	1
7	地域で子育て家庭に絵本の配布をしてほしい	5	4	3	2	1
8	絵本は各家庭で選んだ方がよい	5	4	3	2	1
9	絵本は図書館で借りて読む方がよい	5	4	3	2	1
10	地域で読み聞かせ活動をしてほしい	5	4	3	2	1
11	図書館で読み聞かせ活動をしてほしい	5	4	3	2	1
12	絵本を紹介するイベントを地域で開催してほしい	5	4	3	2	1
13	絵本を販売するイベントを地域で開催してほしい	5	4	3	2	1
14	乳幼児には保護者が読み聞かせをするべきだ	5	4	3	2	1
15	家庭で読み聞かせをすることは難しい	5	4	3	2	1
16	乳幼児には専門家が読み聞かせをするべきだ	5	4	3	2	1
17	社会のルールの理解を促す絵本は必要だ	5	4	3	2	1
18	ことばの育ちに役立つ絵本は必要だ	5	4	3	2	1
19	自然環境の理解を促す絵本は必要だ	5	4	3	2	1
20	病院等の待合室に絵本があると過ごしやすい	5	4	3	2	1
21	病院等の待合室で読み聞かせがあるとよい	5	4	3	2	1
22	病気の理解に絵本は役立つ	5	4	3	2	1
23	病気の理解に役立つ絵本の紹介があるとよい	5	4	3	2	1
24	病気の理解に役立つ絵本の配布があるとよい	5	4	3	2	1
25	障がいの理解に絵本は役立つ	5	4	3	2	1
26	障がいの理解に役立つ絵本の紹介があるとよい	5	4	3	2	1
27	障がいの理解に役立つ絵本の配布があるとよい	5	4	3	2	1
28	病気の人がいる家族のための絵本は必要だ	5	4	3	2	1
29	障がいを持つ家族がいる家庭のための絵本は必要だ	5	4	3	2	1
30	触覚を使うなど、障がいを持つ子が楽しめる絵本が必要だ	5	4	3	2	1

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

何かご不明な点がありましたら、下記までご連絡ください。

城西国際大学福祉総合学部福祉総合学科 佐野智子 sano@jiu.ac.jp 広瀬美和 hirose@jiu.ac.jp